

Y03b ナラトロジーを活用した天文学普及の試み - 「星と森と絵本の家」開館に向けて -

縣秀彦、室井恭子、野口さゆみ、青木真紀子、藤田登起子、高田裕行、中桐正夫、小栗順子、村上和弘(国立天文台)、宇山陽子、築地律(三鷹市役所)、広松由希子

子どもたちや市民に向けての科学知の伝達場面においては、受け手・送り手間で「血の通ったコミュニケーション関係」が成立することが重視である。国立天文台天文情報センターでは、アストロノミー・パブ、星と風のサロン、観望会等の活動を通じて、科学コミュニケーション・シーンにおける「物語る」こと(ナラティブ行為)が果たす役割を検討してきた。その成果に基づき、国立天文台と三鷹市は、「科学の語り部」が活躍する「三鷹市立星と森と絵本の家」事業を推進し、絵本の家運用計画において有効なナラティブの活用を目指している。

「星と森と絵本の家」は、大正4年建設で文化財としての評価が高い国立天文台三鷹の旧1号宿舍の土地と建物を地元三鷹市に無償貸付、無償譲渡し、2009年7月の開館を目指して市が整備を進めている。絵本の家は、三鷹市が公設公営で運営し、国立天文台や市民ボランティアと協同で企画運営を進める新しいタイプの生涯学習施設である。絵本の家では、天文学や自然科学に関連する絵本などを、紹介者の興味や想いを伝える形式で展示し、スタッフが展示案内や絵本の読み聞かせなどを行い「見る・読む・聞く」場を提供する。また、大正初期の建物に再現された昭和の暮らしぶりに五感で触れ、宇宙を身近に感じられる緑豊かなまたとない立地を生かし、観測、観察、飼育、工作、野外遊びなどの自然界の営みに直接触れる活動、表現活動、昔遊び、季節行事、暮らし体験など、アートとサイエンスを通して「語る・触る・作る」活動に、国立天文台職員や市民ボランティアが「語り部」として参加できるよう整備を進めている。